

「ホ  
ツ  
ト  
ミ  
ン  
ト」

朝比奈 波音

人物表

上杉菜々（28） 料理教室の講師

小笠原誠（56） 菜々の父・元料理人

岩垣健太（30） 『岩垣薄荷園』の農場主

岩垣静子（60） 健太の母

渡辺大貴（28） 菜々の同僚

長谷川由佳（46） 菜々の上司

上杉素子（50） 菜々の母

あらずじ

料理教室に勤務の上杉菜々は、初めてクラスを任せられ薄荷レシピを披露することに躊躇い、料理人だった父を思い出す。菜々は、母親の上杉素子の紹介で滝上にある『岩垣薄荷園』を訪れる。菜々は職員の中に、父親によく似た小笠原誠がすることに気付くと、自分が娘だと悟らせる。ところが、菜々の気持ちに反し、誠は中々、父だと認めない。そんな中、菜々は誠が、「高次脳機能障害」を患っていることを知り、ショックを受ける。菜々は自分の気持ちを抑え、誠を一人の人として接するようになり、二人は心を通わせる。大雨で足止目を食らう菜々は、強引に帰りがり、誠に引き止められると、一瞬、誠の記憶が蘇ったことに気付く。と同時に、誠が激しい頭痛に襲われ倒れる。菜々は必死で誠を助け、薄荷レシピを誠のために披露する。帰宅した菜々は、誠のことを記憶がなくても父親だと自分の心の中で認める。

S E 調理器具が擦れる音。

菜々「え？ 本当ですか!？」

由佳「うん」

菜々「私が、新しい薬膳料理クラスの講師に？」

由佳「そうよ。菜々ちゃん、アシスタントと  
しても優秀だし。生徒さんたちからも人気  
があるし」

菜々「ありがとうございます！」

由佳「いい機会なんだから、頑張っ！」

菜々「はい。けど、薬膳なんて。私に教え  
られるんでしょうか？」

由佳「大丈夫！ 菜々ちゃんの料理の教え方、  
上手だし。薬膳だって、すぐに覚えられる  
から」

菜々「でも……」

由佳「菜々ちゃん？」

菜々「はい？」

由佳「あなたには、料理の才能がある。菜々  
ちゃんのお父さんと同じでね。だから、自

信を持ちなさい」

菜々「はい！」

由佳「あ、そうそう！」

菜々「何でしょう？」

由佳「あと、初回のレシピ、3日後までに考

えておいてね！」

菜々「えっ？」

由佳「テーマは、そうねえ……。もうすぐ初

夏だから、薄荷がいいかな？」

菜々「えっ!?」

由佳「じゃ、よろしく！」

菜々「レシピ考えるって……。そんなの、無

理だよ」

大貴「よっ！ 講師デビュー、おめでとう！」

菜々「ありがとう、って。そんなに呑気なこ

と、言わないでよ！」

大貴「何落ち込んでんの？ めでたいことじ

ゃん！」

菜々「そうだけど……」

大貴「菜々、ずっとクラス任されたって、

言っ て た じ ゃ ん ？ 」

菜々 「 講 師 っ て い っ て も 、 薬 膳 ク ラ ス だ よ ？ 」

料 理 は 教 え ら れ て も 、 薬 膳 は 自 信 な い 」

大 貴 「 ど う し て ？ 」

菜々 「 だ っ て 、 知 識 な い も ん 。 し か も 薄 荷 な

ん て 、 尚 更 ！ 」

大 貴 「 ま あ 、 薄 荷 も 一 応 、 薬 膳 だ け ど な 」

菜々 「 薄 荷 っ て さ 。 ス ー ス ー す る や つ だ よ ね ？ 」

肉 と か 魚 と か 、 料 理 に 合 う の か な ？ 」

大 貴 「 俺 は 意 外 と 合 う と 思 う よ ？ 」

菜々 「 あ ー あ 。 こ ん な 時 、 お 父 さ ん が い て く

れ た ら な あ 」

大 貴 「 そ う い え ば 、 菜 々 の お 父 さ ん っ て 、 料

理 人 だ っ け ？ 」

菜々 「 そ う 。 ホ テ ル の 元 シ ェ フ 。 料 理 の 腕 も

良 く て 、 お 客 さ ん か ら も 評 判 良 か っ た っ て 、

由 佳 さ ん か ら 聞 い た こ と が あ る 」

大 貴 「 由 佳 さ ん っ て 、 知 り 合 い な の ？ 」

菜々 「 お 父 さ ん と 一 緒 に 働 い て た 仲 間 な ん だ

っ て 。 と い っ て も 、 も う 20 年 以 上 も 前 の 話

らしいけど」

大貴「ねえ、お父さんとは？」

菜々「さあ。お母さんと離婚してから、一度も会ってないから」

大貴「会いたい気持ちはあるんでしょ？」

菜々「会いたくても、居場所がわからないし、生きてるのか、死んでるのかもわからない」

大貴「そっか……」

菜々のM「両親が離婚したのは、私が5歳の時。夜中にお母さんの怒鳴り声が聞こえ、目を覚ました翌朝だった。私がいつものように、お父さんの頬に『行ってらっしゃい』のチューンをして、ニツコリと微笑んでくれたのを最後に、父は私の前から消えた」

SE 玄関のドア、開閉音

菜々「ただいま！」

素子「おかえり〜。あら、どうしたの？ 随

分疲れた顔、してるけど？」

菜々「うん。仕事でちよつと、ね」

素子「何かあった？」

菜々「今度、新しくクラスの講師、やることになったさ」

素子「あら、おめでとう。良かったじゃない？」

菜々「どうなんだろう。だって、薬膳のクラスだよ？」

素子「体によさそうでいいじゃない」

菜々「しかも薄荷を使ったレシピ、考えなきやいけないし」

素子「あら、そう……。ねえ薄荷なら、ゼリとか、どう？　ほら菜々、昔、お父さん

とよく作ってたじゃない？」

菜々「覚えてない。そんな、何十年もまえのこと」

素子「そう……。それも、そうね」

菜々「何とかならないかな？」

素子「ねえ、良かったらここ、行って見たら？」

菜々「何これ？　手紙？」



素子「お母さんのお友達の嫁ぎ先なの」

菜々「『岩垣薄荷園』？」

素子「薄荷農園だから、今回のレシピを考えるのに参考になるんじゃない？」

菜々「滝上じゃん！車で4時間以上かかるんだよ？嫌だよ、そんな遠いところ」

素子「アイデアでるかもよ？」

菜々「それは、まあ……」

素子「どう？とりあえず、行ってみたら？」

菜々「そうだなあ。明日、仕事休みだし。ちよつと行ってみるか！」

S E 車の走る音

菜々のM「あれから23年。お父さんが、今どこで何をしているのか。私は全く、何も知らない」

タイトル「ホットミント」

S E 車が止まる音

菜々「へえ。ここが『岩垣薄荷園』か……」

S E 車のドアが開く音

菜々「うわあ、広い。薄荷の葉の緑色が、鮮やかできれい！まるで草原に来たみたい」

S E 風が吹く音

菜々のM「それに、薄荷の香り。スーとする爽やかな香りが、鼻から抜けて心地いい！」

菜々「薄荷って、意外といいのかも？」

健太「こんにちは！」

菜々「こんにちは！」

健太「もしかして、上杉奈々さんですか？」

菜々「はい」

健太「ようこそ。『岩垣薄荷園』へ。農場主の

岩垣健太と申します」

菜々「初めまして。上杉菜々と申します。今日はお世話になります」

健太「いえ、薄荷のことなら、うちに任せて下さい」

菜々「よろしくお願いします！」

健太「札幌からじゃ、遠かったでしょう？ 疲れてないですか？」

菜々「大丈夫です。遠いと言っても、車で4時間半ほどですし。それに、仕事も久しぶりに休みがもらえたので」ちよつと、旅行気分です」

健太「それなら良かったです。ではまず、事務所の方にご案内します」

菜々「はい！」

S E ドアの開閉音

健太「さ、どうぞ。お入りください」

菜々「失礼します」

健太「母さん！　上杉さん、到着したよ。上杉さん、こちら、母です」

菜々「初めました。上杉菜々と申します」

静子「ようこそ『岩垣薄荷園』へ。あなたが

菜々ちゃん？」

菜々「はい。母がお世話になっております」

静子「とんでもないわ。私の方がお世話され

てるかも。素子ちゃん、元気？」

菜々「はい、すっごく元気です」

静子「そう。良かったら座って、これ飲んで

みて」

菜々「じゃあ、失礼して。いただきます」

静子「：：：どう？　美味しい？」

菜々「甘味があつて、美味しい！」

静子「これね、うちの薄荷で作ったハーブテ

ィーなの」

菜々「えく、スゴイ！」

静子「でしょ？　日本の薄荷は、甘味がある

のが特徴なのよ」

菜々「そうなんです、覚えておきます」

誠「作業、終わりました」

健太「ありがとうございます。ございます。お疲れ様でした！」

菜々「お父さん？」

誠「えっ？」

菜々「あの、こちらの方は？」

健太「うちの農園で長年働いてくれている、小笠原誠さんです」

菜々「小笠原誠……」

健太「誠さん、こちらは札幌から来た、上杉奈々さん」

誠「どうも。初めました」

菜々「初めました？」

誠「ようこそ、いらっしゃいました」

健太「誠さん、上杉さんは札幌で料理教室の先生をされてるんですって」

誠「料理教室を？」

健太「なんでも、新しい薄荷レシピを考えるために、うちの農園で薄荷の勉強がしたいんです」

誠 「そうですね」

健太 「そうだ！ 誠さんが上杉さんを案内してあげて下さい」

菜々 「誠 「えっ？」

静子 「そうですね。誠さん、料理上手だし。きっとレシピ考案の力になってくれるわ」

誠 「分かりました！」

健太 「上杉さん、分からないことがあったら、誠さんに何でも聞いてください」

菜々 「あ、はい：：」

誠 「じゃあ、上杉さん。まずは畑から行きましょう！」

菜々 「はい」

菜々のM 「同姓同名で容姿も額のほくろも。お父さんの特徴と似てる。この人、もしかして：：？」

SE 土を踏む音

誠 「ここが、薄荷畑になります」

菜々 「あの？」

誠 「どうですか？ 薄荷の葉の緑が、一面に広がって。美しいでしょう？」

菜々 「ええ、まあ」

誠 「薄荷は少し前まで北見が、生産量一位だったんですが、今はここ、滝上が一番なんですよ？」

菜々 「あの！」

誠 「はい？」

菜々 「小笠原さんって、ここで働いて何年になるんですか？」

誠 「もうすぐ、<sup>23</sup>年目です。で、薄荷は……」

菜々 「ご家族は？」

誠 「薄荷はミントの仲間ってことは知ってます？」

菜々 「知りません！」

誠 「じゃあ、精油になるミントには、3種類あることは？」

菜々 「知りません」

誠「じゃあ一から説明しないとダメですね」  
菜々「あの」  
誠「はい？」  
菜々「小笠原さんって、ご結婚は？」  
誠「薄荷の花って、白っぽいピンク色で、可愛くて綺麗なんですよ」  
菜々「あの。私の話、聞いてます？」  
誠「上杉さんこそ。僕の話、聞いてます？」  
菜々「お願いだから、答えてください！ご家族は？」  
誠「さあ？」  
菜々「さあ、って。いますよね？」  
誠「分かりません」  
菜々「はっ？ 分からないって、両親とか兄弟とか。誰かいるでしょ？」  
誠「覚えてないなあ」  
菜々「まさか、そんなはずは……」  
誠「上杉さんは、薄荷は何科の植物だと思います？」  
菜々「何科でもいいですよ、そんなの」



誠 「薄荷は、しそ科の植物なんですよ」

菜々 「へえ、しそ科なんですネ……。って、話を逸らさないでください！」

誠 「薄荷のこと、知りたくないんですか？」

菜々 「私はそれより、あなたのことが知りた  
いです！」

誠 「参ったなあ。そんなに僕のこと  
が好きなんですか？」

菜々 「あーもう！ 冗談はよしてください！」

誠 「上杉さんこそ、冗談はやめてください」  
菜々 「私は冗談なんて、言っ  
てません。ただ、

小笠原さんがある人に、似てるんで……」

誠 「ある人とは？」

菜々 「私の父です」

誠 「お父さん？」  
菜々 「あなたとよく似て、額にほくろ  
があります」

誠 「それなら私の他にも、似た人は  
いるでしょう？」

菜々 「そんな！ 名前だって、同じで  
。小笠

原誠と言います」

誠「同姓同名の人も、沢山います」

菜々「けど、その両方が一致する人は、そんなにいないでしょ？」

誠「上杉さん？」

菜々「はい？」

誠「お気持ちは分かるけど、僕はあなたのお父さんじゃないです」

菜々「けど、他にも似てるところが……」

誠「ごめんなさい。違うと思います」

菜々「そんな……」

誠「さ、次、蒸留室に行きますよ」

菜々「はい」

菜々のM「どうして？ 小笠原さんは、私の

お父さんとそっくりなのに、彼は私のことを娘だと思っていない」

SE 蒸留器がコトコトする音

誠「ここが蒸留室です」

菜々「すごい！　大きな釜ですね！」

誠「水蒸気蒸留法といって、薄荷はこの釜で煮て、沸騰した時に出る水蒸気を集めるんです」

菜々「へえ」

誠「それから、冷やしたものを抽出する。この方法で精油を作ってるんです」

菜々「そうなんだ。薄荷って、精油の他には何ができるんですか？」

誠「色々ありますよ。お菓子や料理、虫よけとか」

菜々「なるほど」

誠「お風呂に入れば、体感温度が少し下がって、涼しく感じるんです」

菜々「凄い！　そんな効果もあるんですね！　でも、北見とどう違うんですか？」

誠「オホーツク海寄りで、薄荷を育ててることは同じですが、滝上は春になると芝桜が見ごろになるんです！」

菜々「そうなんだ」

誠「北見も良い所だけど、ここ滝上も負けて  
ませんよ」

菜々「あの。小笠原さんは、どうして薄荷農  
園で働いてるんですか？」

誠「理由は色々ありますが、僕にとって薄荷  
は、精神安定剤のようなものなんです」

菜々「精神安定剤、ですか？」

誠「何というか、薄荷のストと清涼感のある  
香りを嗅ぐと、なんか頭の中がすっきりし  
て、落ち着くんです」

菜々「分かります。リフレッシュされる感じ、  
ですよね」

誠「それに、葉を口に含むと、なぜか僕の場  
合は頭痛が治まるんです」

菜々「頭痛って？　どこか具合でも悪いんで  
すか？」

誠「僕、高次脳機能障害なんです」

菜々「高次脳機能障害？　それって？」

誠「はい。記憶喪失です」

菜々「えっ？」

誠「覚えてないんですけど、交通事故にあったらみたいで」

菜々「いつ頃ですか？」

誠「23年前になりますかね」

菜々「そんな、どうして？」

誠「よく分からないけど、ある時、目が覚めたら病院のベッドの上にいました」

菜々「その時のことは？ 覚えてるんですか？」

誠「覚えているのは、頭がズキズキと痛むことだけ。最初は、自分が誰なのか、どこから来たのかも分かりませんでした」

菜々「じゃあ、名前は？」

誠「ベッドの横に、バッグが置いてあったんです。中を見たら、鏡に映るこの顔と同じ写真の免許証が入っていて」

菜々「その免許証で名前を？」

誠「はい。初めは名前を見るだけで、頭痛が酷くて嫌だったんです。けど、色んな人に

名前を呼ばれるうちに、認識したんです」

菜々「どういう風に？」

誠「あー、自分は小笠原誠なんだなあーって。

そのうち頭痛はなくなりました」

菜々「事故の原因は何だったんですか？」

誠「分からないです。ただ、ひき逃げではな

いことだけは、警察の人から聞きました」

菜々「記憶を思い出そうとは、しないんです

か？」

誠「何度も思い出そうとしました。けど、そ

のたびに頭痛が酷くて」

菜々「そうなんですネ」

誠「それに、精神科のお医者さんにも言われ

たんです」

菜々「何を？」

誠「無理して思い出す必要はないって。思い

出そうとするから、頭痛が起こる」

菜々「なるほど……」

誠「思い出せる時には、自然とその時が来る。

それまで待つように、と」

菜々「そうかもしれないね……」

菜々のM「ショックだった。小笠原さんに、そんな辛い過去があったなんて。そしてその時私は思った。小笠原さんは、私の本当のお父さんだ！」

SE 風の音。

薄荷の葉が擦れる

菜々のM「お父さんの記憶を、無理に思い出させようとはしない。私は、心にそう誓っていた」

誠「お父さんとは、どのくらい会われてないんですか？」

菜々「もう23年になります」

誠「なるほど。僕が事故にあった時期と、重なりますね？」

菜々「そうですね」

誠 「会いたいとは思わないんですか？」

菜々 「もちろん、会いたいです。けど……」

誠 「けど？」

菜々 「私が5歳の時に、母と離婚して。それ以来、父とは一度も会ってなくて」

誠 「そうでしたか」

菜々 「連絡もないから、生きてるのか、死んでるのかも、わかりません」

誠 「大丈夫。上杉さんのお父さんは生きてますよ、きっと」

菜々 「えっ？」

誠 「この地球のどこかで。元気に生きてると思えます」

菜々 「そうですよね」

誠 「はい」

菜々 「あの？」

誠 「何でしょう？」

菜々 「一回だけでいいです。お願いしてもいいですか？」

誠 「何を、ですか？」



菜々「菜々って、呼んでもらえますか？」

誠「菜々、さん」

菜々「：：ありがとうございます」

誠「そろそろ事務所に戻りましょうか？」

菜々「はい」

S E ドアの開く音

健太「お疲れ様でした！」

誠「一通り、案内が終わりました」

健太「どうでした？」

菜々「薄荷のこと、よく分かりました」

静子「それは、良かったわ」

菜々「今日は、ありがとうございます！」

S E 雷の轟音

誠「おや？ 雷ですね」

健太「うわぁ。こりゃ、一雨来るかなあ」

S E 土砂降りの雨音

健太「やっぱり降ってきた！」

菜々「大変！急いで帰らないと！」

誠「待っててください。この様子だと、これから雨がひどくなりますよ。せめて、止むまでここにいた方がいい」

健太「誠さんの言う通りだと思います」

静子「そうよ。何もこの雨のなか、急いで帰ることもないんじゃない？」

菜々「でも、ご迷惑をおかけしても……」

静子「うちは大丈夫。よかったら、今日は泊まっていきなさい」

菜々「じゃあ、お言葉に甘えて……」

静子「良かった。じゃあお布団、用意してくるわね」

健太「僕もちょっと、蒸留室見てきます！」

S E 電話の着信音

菜々「もしもし？」

由佳の声「あ、菜々ちゃん？」

菜々「由佳さん、どうかしたんですか？」

由佳の声「実はね、子供が急に熱、出しちゃって。明日の代わりの先生を探してるの」

菜々「えっ？明日、ですか？」

由佳の声「そうなの。申し訳ないんだけど、

菜々ちゃん、お願いできる？」

菜々「大貴じゃダメなんですか？」

由佳の声「さっき、連絡したんだけど、また

繋がらないのよ」

菜々「……わかりました」

S E 雷の轟音

菜々「ごめんなさい。仕事が入ったので、や

っぱり私、帰ります！」

誠「上杉さん、待って！今は危険です」

菜々「それでも、行かないと」

誠「これから暗くなるし、車の運転するなら、

尚更視界が悪くなって危ないです。ここにいた方確実に安全です」

菜々「困ったなあ。明日は担当の先生がお休みで、変わりに私が料理を教えることになっ  
て：：」

誠「そのくらい、他の人に変わってもらうことはできないんですか？」

菜々「仕事に穴をあけることだけは、したくないんです。失礼します！」

誠「菜々さん！」

S E ドアが勢いよく閉まる音

菜々「そこをどいてください！」

誠「ダメです！ 行かせません！」

菜々「小笠原さん」

誠「君が言うことを聞くまで、僕はドアの前から離れない」

菜々「どうして？」

誠「心配だからです」

菜々「なんで？」

誠「分からない。なんでかは分からないけど、このまま帰らせてはいけない気がするんです」

菜々「そんなのって、余計なお世話じゃ？」  
誠「分からないです！　けど、菜々さんのことを、守らなきゃって、思うんです」

S E　菜々の携帯、着信音が鳴る

菜々「由佳さんからだ！　ごめんなさい。私、行きます！」

誠「待つんだ！　菜々！」

菜々「お父さん!？」

S E　雷がゴロゴロと鳴る

誠「うっ。頭が、痛い……」

菜々「お父さん、大丈夫？　しっかりして！」

S E ドアが開く音

健太「どうしました？」

菜々「小笠原さんが、急に頭痛を訴えて」

健太「誠さん、大丈夫ですか？ どうしてこ

んなことに？」

菜々「分からない。分からないけど、たぶん

何かを思い出したんだと思います」

誠「だ、大丈夫です。僕は……」

菜々「小笠原さん」

健太「誠さん！ 僕、畑に薄荷を取りに行っ

てきます！」

菜々「あの！ 私に行かせてください！」

健太「でも、いくら近くでも、この大雨の中

を女性一人じゃ危険です！」

菜々「大丈夫です。小笠原さんを、お父さん

を助けたいから！」

菜々のM「お父さんは一瞬でも、私のことを

何か思い出した。だから頭痛が起こったん

だ。私は必死だった。小笠原さんをお父  
さんを頭痛から、その原因となる記憶から  
救い出したいくて」

S E 土砂降りの雨音

菜々「雨が強くて、前が見えない！」

健太「上杉さん！ 僕も行きます！」

菜々「大丈夫です。私一人で行かせてくださ

い！」

健太「けど、危ないから！」

菜々「お願いだから、行かせて！」

菜々のM「記憶など、戻らなくてもいい。お  
父さんの頭痛がなくなって、元気に生きて  
さえいてくれれば。私はそれだけでいい！」

S E 雷の轟音

降りしきる雨音

菜々「薄荷の香り。この辺りに……摘めた！」

S E 廊下を走る音

ドアが勢いよく開く

菜々「戻りました！ 小笠原さんは？」

健太「ちょっとだけ意識が朦朧としてるけど、大丈夫です」

誠「菜々……」

菜々「小笠原さん？」

健太「上杉さん。その薄荷を、誠さんの鼻先で香りを嗅がせてください」

菜々「はい！」

健太「その後に、葉っぱを口に含ませてください」

菜々「はい！」

健太「誠さん、もう大丈夫ですよ」

誠「少し、楽になりました」

健太「もう少しです。上杉さん、テーブルの上からお水、取ってください」



菜々「はい！」

健太「誠さん、飲んで！」

誠「……だいぶ、よくなりました。菜々さん、

健太君、ありがとう」

菜々「良かったよ（と、くしゃみ）」

健太「さっきの雨に当たったからでしょう？

今タオル、持ってきてきますね」

菜々「ありがとうございます」

誠「ご心配、おかけしました」

菜々「もう、本当ですよ」

誠「すみません」

菜々「精神科のお医者さんに言われたんじゃ

なかったんですか？」

誠「えっ？」

菜々「無理して思い出さなくていい。その時

が来れば、記憶は自然と思い出すって」

誠「あ！　そうでした」

菜々「小笠原さん？」

誠「はい？」

菜々「私のこと、何か思い出しかけてくれた

「 なんですよね？」

誠 「 どうやら、そうみたいです」

菜々 「 ありがとうございます、お父さん」

誠 「 菜々さん？」

菜々 「 あ、そうだ！ 小笠原さんのために薄

荷のレシピ、思いつきました！」

誠 「 本当ですか？」

S E 調理器具を使う音

菜々 「 できた！」

誠 「 これは？」

菜々 「 薄荷ゼリーです」

誠 「 美味しそうですね。食べる前から、薄荷

のいい香りが漂ってます」

菜々 「 どうぞ、召し上がってください」

誠 「 じゃあ、いただきます」

S E お腹がグーッと鳴る音

菜々「ごめんなさい。私も食べていいですか？」  
誠「もちろんです」

S E 食器が擦れあう音

菜々・誠「いただきます！」

菜々「どうでしょう？」

誠「口の中いっぱい広がる清涼感と、薄荷のほのかな甘み。うん、美味しいです！」

菜々「良かった。：：うん、本当に美味しい！」  
い！」

誠「この薄荷は香りも味も、日本一ですから。僕の頭痛も、これで完治しますよ」

菜々「そうですね」

S E 鳥の鳴き声

菜々「お世話になりました！」

健太「また、いつでも遊びに来てくださいね」

菜々「はい！」

静子「素子ちゃんにも、よろしくね」

菜々「はい、伝えておきます」

誠「菜々さん、お元気で」

菜々「はい。小笠原さんも、お元気で」

誠「もちろんです！」

菜々「じゃあ私、そろそろ行きます」

健太「お気をつけて！」

菜々「はい、ありがとうございます」

S E 車のエンジンがかかる音

菜々「それじゃあ、失礼します！」

健太「さようなら！」

誠「さようなら、菜々。また会える時まで！」

健太・静子「えっ？」

S E 車が走行する

菜々のM「小笠原さんが、本当に記憶をなくしているのか、なくしたふりをしていたの

か。真実はわからなかった。けど、小笠原さんの薄荷や人、私に対する愛は温かすぎるほど、十分に伝わった」

菜々「けど、記憶は本当はどっちだったんだろう：：？ まあ、どっちでもいっつか！」

SE ドアの開閉音

菜々「ただいま！」

素子「お帰り！ どうだった？」

菜々「うん。楽しかったよ」

素子「そう：：」

菜々「あ！」

素子「何？」

菜々「静子さんが、お母さんによろしく、だ  
って」

素子「そう：：」

菜々「それと！」

素子「まだ、何か？」

菜々「お父さんがあの農園で働いていること、知ってたでしょ？」

素子「それは……？」

菜々「ねえ、知ってるなら、何でもっと早く言ってくれなかったの？」

素子「簡単に言えないわよ」

菜々「自分だけ所在知ってたなんて、ズルい」

素子「だって……」

菜々「なんで、もっと早く言ってくれなかったの？」

素子「子供には言えない事情が、親には色々あるの」

菜々「なにそれ」

素子「ごめんね……」

菜々「ま、教えてくれたからいいけどさ」

素子「菜々……」

菜々「疲れたから、ちよつと寝る」

素子「あ、ちよつと！」

菜々「おやすみ」

素子「ねえ、あなた今日、由佳さんにレシピ、

提出する日じゃないの？」

S E 廊下を歩く足音

ドアの開閉音

菜々のM「小笠原さんの、いやお父さんの中に、私の記憶はちゃんと残っていた。例えばそれが、普段忘れていたとしても、ふとした時に蘇る。記憶って、それでいいんだと思う」

S E 目覚ましが鳴る音

菜々「あ！ レシピ提出するの、忘れてた！」

( E N D )